

テスへの手紙2章 「良いわざに熱心な民」

1A 健全な教え 1-10

1B 年配の男女 1-5

2B 若い男性 6-8

3B 奴隷 9-10

2A 恵みの教え 11-15

1B 不敬虔からの救い 11-14

2B 監督の権威 15

本文

テスへの手紙 2 章を開いてください。私たちは前回、1 章で、クレタ島で、長老たちを任命する仕事を任せられたテスにパウロが手紙を宛てていることを見ました。教会には秩序が必要です。そのためには、神を恐れる長老が教会に立てられている必要があります。その秩序と平和があるからこそ、人々は安心した環境にすることができ、そして霊的に成長できます。

そして、反抗的な者、無益な話をする者、人を惑わす者が多くいると指摘しました。そうした乱れの背後には、クレタ島にあった悪しき体質があります。クレタ人の賢人が残した言葉、「いつも嘘つき、悪い獣、怠け者の大食漢」というのがあります。そうした中で、神を知っていると公言しているけれども、行いは否定している者たちがいたということです。

1A 健全な教え 1-10

2 章は、それに対してテスは、健全な教えにふさわしいことを語りなさい、と言っています。

1B 年配の男女 1-5

¹しかし、あなたは健全な教えにふさわしいことを語りなさい。

「健全」というのは、健やかという意味合いもありますし、汚れがないという意味があります。クレタ島にあるような悪い行いから離れた、良い行いのことを意味しています。そして2 節から見ていくことは、人々の示していくべきふるまいが書いてあります。とても实际的で具体的です。それが、「健全な教え」と、パウロが呼んでいるものです。

私たちが「教え」と聞くと、どうしても教理とか教義、あるいは信条のような、体系的な教えであり、それは知的な理解に属すると思ってしまう。けれども、そうではないのです。教えには、そこに具体的な行いがともないます。イエス様は弟子たちに、「わたしがあなたがたに命じておいた、

すべてのことを守るように教えなさい。(マタイ 28:20)」とされています。教えていることを知るとは命じていないのです。守るように教えなさいと命じておられます。

もっと分かりやすくいうと、「地に足の着いた教え」と言ったらよいでしょう。無益な議論、言葉だけの言い争い、空しい、中身のない教えではないのです。地道に、主に仕えて、言われたことを守っていくということです。そこにだけ、御霊が実を結ばせてくださいます。それは、とても地味なことです。慎み深い考え方です。けれども、その地面をしっかり踏みつけて、上り坂を歩いて行くような歩みこそが、人々に対して光となることができます。

² 年配の男の人には、自分を制し、品位を保ち、慎み深く、信仰と愛と忍耐において健全であるように。

教会の中にいる、年配の男性に対して、このことを諭しなさいと命じています。そこでは、「自分を制」する、ということが始まりです。感情に任せて、品位のないことをしないように、ということです。クレタ人の中には、そうではない年配の男が多かったのではないかと思います。日本では、どうでしょうか？歳を取っていれば、熟練した、知恵のあるふるまいができる特権がありますが、必ずしもそうではない人たちがいますね。むしろ、幼い行動を取る人々がいます。自分の知識や経験を、尋ねもしないのに振り回したりします。老害という言葉さえ、語られていますね。しかし、キリスト者となれば、そうした行いから離れることができます。そうやって品位を保つのです。

そして、「慎み深く」とありますが、これは他の人々にも使われている言葉です。ロマ 12 章で、「12:3 私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがた一人ひとりに言います。思うべき限度を超えて思い上がってはいけません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深く考えなさい。」神の恵みによって、信仰によって与えられているところで、慎み深く考えなさいと言っています。つまり、慎み深さとは、恵みによって主から与えられていること以上のことをせず、それ以下のこともしないということです。主に命じられていること、言われていることに、地味に、しかし熱心に従うということです。

そして、「信仰と愛と忍耐」において健全に、とありますが、愛によって働く信仰が大事ですが、そこには忍耐を働かせる必要があります。忍耐をもって信じていきます。そして愛には、忍耐があります。それらにおいて、汚れが無いようにしておく、健全にしておくということです。

³ 同じように、年配の女の人には、神に仕えている者にふさわしくふるまい、人を中傷せず、大酒のとりこにならず、良いことを教える者であるように。

年配の女の人に対しては、「神に仕えている者にふさわしくふるまい」というのが主眼になります。

神に仕える人々です。イエス様が宣教の旅をしている時に、弟子たちも多くいましたが、仕えている女たちが多くいました。

そのふさわしくふるまう中に、「人を中傷せず」というのがあります。年配の女たちに、噂話を好む傾向があったからです。奉仕をしている中で、井戸端会議のようになり、噂をし始めます。しかし、中傷は大きな罪です。中傷のギリシア語は、そのまま「悪魔」を意味します。悪魔こそが、兄弟を告発する者であり、中傷をしている時には、御霊に感化されているのではなく、サタンに感化されているのです。そして、「大酒のとりこにならず」とあります。当時の社会では、年配の女の人たちに深酒に酔いしれる人々が多かったようです。

そして、「良いことを教える者」とあります。それが 4-5 節です。⁴ そうすれば、彼女たちは若い女の人に、夫を愛し、子どもを愛し、⁵ 慎み深く、貞潔で、家事に励み、善良で、自分の夫に従順であるように諭すことができます。神のことばが悪く言われることのないようにするためです。

年配の女の人が、若い女の人たちに教えることができます。もちろん、監督が若い女の人たちに、一般的な教えることはいいのですが、年配の女性だからこそ若い女性に教えられることは、数多くあります。

まず、夫と子供を愛するということです。テモテへの手紙から見ますと、若い女性たちには、時間が比較的ある人々が、家庭で主に仕えるのではなく、遊んでいるようなことが多かった感じがします。「Ⅰテモ 5:13 そのうえ、怠けて、家々を歩き回ることを覚えませう。ただ怠けるだけでなく、うわさ話やおせっかいをして、話さなくてよいことまで話すのです。」それだけでなく、「様々な欲情に引き回されて罪に罪を重ねて」いる様子も描かれています(Ⅱテモテ 3:6)。おそらく、他の男と遊ぶことも、その時代の習慣にはしばしばあったのではないのでしょうか。

したがって、若い女性には自分の家庭を愛しなさいという教えが中心です。そこには、自分の夫がいます。子どもがいます。自分中心にならないで、彼らを愛するのです。そしてもっと具体的には、貞潔を守り、家事に従事します。ここにも再び「慎み深さ」が書かれていますね。家庭を大事にして、家事をすることは、とても地味な働きです。けれども、主はそこに専念することに、大きな意義を見出しておられるのです。主にある子育ては、主の目には伝道集会で救われる何人もの魂と同じぐらい大切なもので、匹敵するのです。そして、善良で、自分の夫に従順とあります。反抗的なのが、クレタ島での文化にあったようですから、この部分も大事でしょう。

2B 若い男性 6-8

⁶ 同じように、若い人には、あらゆる点で思慮深くあるように勧めなさい。

ここは、若い男の人たちのことです。「思慮深くあるように」ということです。若者の良さは、その情熱でしょう。勢いがあります。けれども、それが何十年も後にまで尾を引く、愚かな判断や決断もあります。今していることだけでなく、主がすぐに来られないのであれば、何十年後のことも考えて、今の決断をします。

⁷また、あなた自身、良いわざの模範となりなさい。人を教えることにおいて偽りがなく、品位を保ち、⁸ 非難する余地がない健全なことばを用いなさい。そうすれば、敵対する者も、私たちについて何も悪いことが言えずに、恥じ入ることになるでしょう。

テトス自身が若者です。それで、ここで若い男の人に対する言葉の中に、テトスを入れています。そこで大事なのが、何よりも「良いわざの模範」となることです。教会には、反抗的で、無益な話をする者、人を惑わす者たちがいます。彼らに対して、議論で言い争うことで対応するのではなく、自分自身が教えていることに、自分が生きることに集中するのです。それが、ここで言っている、「良いわざの模範」です。自分の教えていることが、生活の中に見えるようにすることです。信者たちは、そのように落ち着いた生活をしている指導者に信頼を寄せることでしょう。言葉の言い争いに関わるのではなく、しっかりと教え、人々を指導して、そして人々の世話をしている姿を見たいと願うはずで、地に足の着いた生活こそが、人々に良い模範となります。

そして、「人を教えることにおいて偽りがなく、品位を保ち」と言っていますね。それが今、説明したことです。教えていることが、空疎な議論ではなく、生活に生かされているということです。それによって、品位が保たれています。

それから、「非難する余地がない健全なことば」と言っています。隙を見せないということです。自分の心に、何か不純なものがあれば、それを反対者はとことん突いてきます。健全であることに、行き過ぎはありません。

それによって、「敵対する者も、私たちについて何も悪いことが言えずに、恥じ入ることになる」と言っています。ネヘミヤのことを思い出します。エルサレムの城壁の再建工事で、反対者は何とかして、彼を自分たちのところに連れて来るべく、あらゆる工作をしかけます。しかし、ネヘミヤは自分の持ち場を離れませんでした。そして、人々に工事に専念することを強く指導します。それによって、城壁が完成し、敵の面子が丸潰れになります。敵対する者に敵対すれば、それは敵の思うつぼです。そうではなく、自分たちに任せられたことをしっかりと果たしていることこそが、相手を恥じ入らせることになるのです。

3B 奴隷 9-10

⁹ 奴隷には、あらゆる点で自分の主人に従って、喜ばれる者となるようにし、口答えせず、¹⁰ 盗んだ

りせず、いつも善良で信頼できることを示すように勧めなさい。それは、彼らがあらゆる点で、私たちの救い主である神の教えを飾るようになるためです。

教会の中には、奴隷が数多くいました。ローマ社会で半数は奴隷でした。そして、キリストの福音は、奴隷であっても自由人であっても一つなのだという平和をもたらします。ゆえに、ローマ社会において、教会は衝撃的であったに違いありません。自由人と奴隷が同じところに並んで、近くに座っているということ自体は、驚く光景だったのです。

そして、奴隷に対しては、良く主人に従いなさいというのが、健全な教えになります。これは決して、奴隷制度を支持している発言ではありません。奴隷制度は望ましくないものでありますが、その中において、この世に調子を合わせない自由なふるまいをすることができるのです。何をもって、奴隷が自由になれるのか？それは、奴隷にしばしばあった、見かけの従い方から解放されていることです。奴隷の大半は、見かけだけで主人に従っていました。また、口答えした奴隷もいたでしょう。クレタ人には、そういう奴隷が多かったのかもしれませんが。そして、主人のものを盗むことは日常茶飯事でした。そうではなくて、善良で信頼できることを示すのです。

そして、興味深い表現が、「私たちの救い主である神の教えを飾るようになる」というものです。奴隷が、飾り物や着る物に選択肢はほとんどなかったでしょう。けれども、こうした善良で信頼できることをしていれば、それが救い主である神の教えで着飾っている、というのです。奴隷の人が福音を主人に口に伝えることも大事でしょうが、それよりも、行いによって、主人に従うことによって、伝えることができるのです。主人に、「いったい、この奴隷は何でこうも他の奴隷と違うのか？」と驚くはずです。その人には、良い行いという飾り物があると、主人には見えるはずです。

2A 恵みの教え 11-15

これらが健全な教えですが、それを可能にしたのが神の恵みなのだというのが 11 節からの教えです。

1B 不敬虔からの救い 11-14

¹¹ 実に、すべての人に救いをもたらす神の恵みが現れたのです。

パウロは、年配の男、年配の女、若い女の人、それから若い男の人、そして奴隷と、教会にいる人々のふるまい方について教えました。逆を言うと、教会にはそれだけ多様な人々がいたということです。そこで、パウロは、神の恵みの壮大さを語ります。すべての人に救いをもたらすほど、神は恵み深いということです。その恵み深さが、今の時代に主が教会を通して現し出してくださった、ということです。

パウロは、テモテへの第一の手紙でも、「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。(2:4)」と言いました。社会におけるあらゆる人が、救われることを神が願っておられるのだということをふまえて、教会の人々が、外部の人たちからそしりを受けることのないように気を付けなさい、というのが、これまでの教えだったのです！5節で、「神のことが悪く言われることのないようにするためです。」と書いていましたね。

そして、「恵み」であります。改めてその意味を知りたいと思います。エペソ 2 章 3-5 節です。「2:3-5 私たちもみな、不従順の子らの中であって、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。」神の御怒りを受けるべき、罪の中に生きる者たちに、神はキリストにあって生かしてくださいました、という神の豊かな憐れみです。恵みというのは、神が神であるがゆえに、一方的に示す好意です。私たちの側に、なんら神から気に入られるものはありません。しかし、神が憐れみ深いご性質を持っているので、神のそのご性質ゆえに私たちに好意を寄せて、良くしてくださいます。

これがどうしても理解できません。仏教の因果応報のように、原因と結果あってこそその世界だからです。人が良くしてもらえるのは、その人に良いところがあるから良くしてもらえるのです、普通は。しかし、神は普通ではないことをされました。

なぜか？それは、人が自分の善で自分を救うことはできないことを、神ご自身がよく知っておられるからです。神の恵みは調子が良すぎる、信じるだけで罪がすべて赦されるというのは調子が良すぎると、しばしば言われます。その反対に、信じるだけで罪赦されるなら、これほど楽なことはない、罪を犯しても大丈夫だと思ってしまうことも、しばしばあります。どちらも間違っています。

神は恐れ多い方で、私たちが、自分が正しいと思っていることを、完膚なきまでに粉碎されるほど、聖く、正しい方であります。それが分かるのは、福音書です。主ご自身の教えです。当時、最も律法の義においては優れているとされたパリサイ人や律法学者の義にまさらなければ、天の御国に入れないと教えられたのです。そして、彼らが厳格に守っているとされていたところにさえ、抜け穴があったり、妥協があったり、形だけで守っているように見せていることをすっぱ抜かれました。そこで、自分がとんでもない罪人であることを悟るのです。

その、とんでもない罪人であることを悟った人が、その負債をすべて帳消しにしていただく神の憐れみを知った時に、あまりにも恐れ多くなり、震えるしかないので。イエスの言われる通り、網を降ろしたら大漁になったペテロが、「私は罪人です、離れてください。」と告白しました。長血をわずらう女が、一瞬にして癒された時に、イエス様に誰だ？と言われて、恐れながら、自分の身に起

こったことをすべて明かしました。こんなにもとんでもない罪人が、なぜか今、立たせられている。神の恵みによって立っている、という畏敬の思いなのです。

¹² その恵みは、私たちが不敬虔とこの世の欲を捨て、今の世にあつて、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、

恵みによって、私たちは初めて、不敬虔とこの世の欲を捨てることができます。そして、慎み深く、正しく、敬虔に生きることができます。なぜ、私たちは罪を犯すのか、いや、犯さざるを得ないのか？自分に罪に打ち勝つ力が足りないからではありません。**その魂が、神のいのちと愛につながっていないから**です。キリストが死なれたのは、ヘブル書には、「死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれている人々を解放する」とあります(2:14)。神に愛され、神のいのちを持っているからこそ、神に命じられていることを喜んで行うことができます。しかし、神から離れているので、自分の魂は、罪と死の法則の中でがんじがらめになり、それで罪を犯し続けているのです。霊的な自傷行為と言ったらよいでしょうか。

ですから、その根本的な不安、恐れから解放したのが、神の恵みなのです。神の愛が、その恐れを完全に取り除きました。キリストがすべての傷を負われ、そして十字架で罪を釘付けにしたのです。すべての責めをご自身が受けとめられたのです。それで、和解の両腕を大きく広げて、受け入れてくださっているのです。このように、魂が神の愛といのちにつながったことによって、私たちは、不法から離れて、正しく生きる自由と力が与えられています。ですから、繰り返しますと、神の恵みが現れたからこそ、罪から離れ、神を畏れかしこむ自由を手にしたのです。

「**慎み深く、正しく、敬虔に生活**」というところを、詳しく見ますと、慎み深さは、自分の内側にある良心に関わります。そして正しいというのは、人と人との関係に及びます。それから敬虔は、神に向かっています。神を畏れかしこむ生き方です。私たちにとって、良心を清く保っていることも大切ですし、隣人に正しくふるまうのも大切ですし、そして神への敬いを忘れないのも大切です。

¹³ 祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるイエス・キリストの、栄光ある現れを待ち望むように教えています。

午前礼拝でじっくり学びましたが、この節が、今の流れから見ると、はっきりと分かります。パウロは、時間の順番を追って、過去、今、そして将来に動かしています。キリストが来られて、すべての人に対する恵みが現れた、という過去があります。そして今は、慎み深く、正しく、敬虔に生活するのです。そして、ここが将来です。イエス・キリストの栄光の現れです。今を生きる私たちは、その現れを待ち望むということです。これが、ザ・キリスト者の生活ですね。キリストのしてくださった過去を覚えます。そして、今、正しく生きます。そして将来の、キリストが戻って来られることを、熱心

に待ち望みます。

さらに詳しく見て行きたいと思います。13 節の動詞に注目してください。「**教えています**」となっていますね。では、この動詞の主語はどこでしょうか？12 節の「**その恵みは**」です。恵みが、大いなる神であり私たちの救い主であるイエス・キリストの、栄光ある現れを待ち望むように教えているのです。主が戻って来てくださることも、神の恵みです。

私たちには、そのような栄光にあずかる資格や価値など、何もないのです。しかし、主が戻って来られたら、私たちはその厳しい裁きから救われるのです。世とともに滅んでも、仕方がない、当たり前なのです。けれども、必ず救ってくださいます。そして、自分のしたことなど、イエス様にとっては、あまりにも小さなことです。ただ言いつけられたことを、行ったにすぎません。けれども、イエス様は、「良い、忠実なしもべだ。あなたはわずかなことに忠実だったから、大きなものを任せよう。」と、大いに喜んでくださるのです。五時から雇われた日雇い人に先に、一日分の労賃を払う主人のような気前良さです。キリストにある神の相続、神の国の相続を共に、共同に受け継ぐなどという、とてつもない富を受けるようにされているのです。恵みによる神の選びなのです。

¹⁴ キリストは、私たちをすべての不法から贖い出し、良いわざ**に熱心な**選びの民をご自分のものとしてきよめるため、私たちのためにご自分を**献げられた**のです。

パウロが、キリストが「**私たちをすべての不法から贖い出**」すと言っているのは、ちょうどイスラエルを、主が、エジプトから贖い出したことを重ねていると思われます。エジプトに災いが下り、イスラエルが紅海を渡ったら、主が水を戻されて、エジプト軍がみな溺れ死にました。このことを主は、全世界で行われます。ご自身の**選びの民**を、世にある不法から贖い出されます。この世から引き出し、ご自分のもの**と**されます。贖うとは、買い戻して自分のものにするという意味です。そして、ご自分の民を引き出された後に、世を不法と共に滅ぼされるのです。ガラテヤ書でも、「キリストは、今の悪の時代から私たちを救い出すために、私たちの罪のためにご自分を与えてくださいました。(1:4a)」と言っています。

どのように、引き出されるのか？それは、テサロニケ第一の4章と5章を見れば、天から降りて来て、生き残っているキリスト者たちを引き上げることによってです。それから、主の日、神の御怒りが地上に下ります。

そして、贖い出された**選びの民**には、神の使命を帯びています。それは、「**良いわざに熱心**」だということです。イスラエルの民も、エジプトから贖い出されたのは、ただ救われただけでなく、ご自分の**宝の民**となるためです。この良いわざというのは、これまで見て来た敬虔の教え、慎み深く、信仰と愛と忍耐において健全である。神に仕える者にふさわしく、中傷しない、大酒のとりこになら

ない、良いことを教える者。夫を愛し、子どもを愛し、貞潔を守り、家事に励むことです。

こうした良いわざに「熱心」になるということが、次に言われています。慎み深く、しかし熱く、と言いましょか。慎み深さがあるからこそ、御霊による火を持続的に燃やしていくことができます。「勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。(ロマ 12:11)」

そして、「ご自分のものとしてきよめる」ということですが、贖い出されても、選びの民イスラエルが、エジプトにあるものを欲しがったり、金の子牛を拝んだりしました。したがって、清められる必要があるのです。私たちも、世から贖い出されましたが、世のものを多分に引きずっています。クレタ島のキリスト者も、クレタ人の悪い体質を多分に持っていました。ゆえに、清められていく必要があります。

そして、イエス様が、「私たちのためにご自分を献げられたのです」とあります。主が、強いられでではなく、いやいやながらではなく、自ら進んでご自身を十字架のおける犠牲の供え物として、お献げになりました。主は、「だれも、わたしからいのちを取りません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。(ヨハ 10:18)」と言われました。実は、私が信仰告白をした、最終的な決断は、この思いを知ったからです。自分が罪人で、だからキリストが十字架につけられたことまでは分かりました。けれども、結局、人に迷惑をかけたということなんだ、と思いました。キリストがいやいやながら、十字架に向かったかと思っていました。ところがそうではない。自ら進んで行かれたのです。つまり、そこは義務ではなく、愛であったのです。それを知った時に、なんでこんな自分のために、と感動して、涙が止まりませんでした。自ら進んで行くというのは、愛かそうでないかの分かれ目です。

2B 監督の権威 15

こうしてパウロは、偉大な神の恵みの教えを説いて、テトス個人に強く命じます。

¹⁵ あなたは、これらのことを十分な権威をもって語り、勧め、戒めなさい。だれにも軽んじられてはいけません。

十分な権威を持って語り、勧め、戒めなさい、ということです。軽んじられてはいけない、ということです。1章の学びで、キリストが教会でかしらであるには、キリストご自身によって立てられた長老たちが必要であると学びました。そこにある権威が教会に平和と秩序をもたらします。ですから、権威をもって語り、勧め、また過ちを正す戒めが必要なのです。これが軽んじられてはいけません。

おそらく、ここが教会の開拓で、多くの牧者が葛藤していることだと思われます。主が牧者を立てておられるという証しが明らかになるまでに、時間がかかります。すべて来ている人々が、それを認めているわけではないのです。この教会がどうなのか？と判断し、批評し、批判する人々は、そ

もそもが、教会はキリストがかしらであることを認めず、自分自身がかしらになりたがっています。まず、ここを強く戒めなければいけないでしょう。コラの反乱で、コラはアロンとモーセが、上に立ちたがっていると責めましたが、上に立ちたがっているのはそもそもコラ自身だったのです。この思い違いに、目を覚まし、深く悔い改める必要があります。

権威が人々に共有されていなければ、監督がどんなに人々に良い模範を示しても、ただの押し付けになり、反発し、中身のない議論を繰り返し、人々を惑わします。3章には、分派の問題が書かれています。人々を自分の味方につけて、分派的行動を起こします。もし、家庭がそのような分派が起こったらどうでしょうか？子供は決して、健全に育ちません。平和があり、安心した環境がないからです。それと同じことが教会で、霊的に起こるのです。当然ながら、健全な教えを実践することさえできません。

大事なのは、繰り返しますが、教会というのはキリストが、かしらだということです。ですから、自分自身で判断して、分析して、善悪を決めるのではないのです。自分がキリストに直接つながっていて、キリスト教会は別のものだと思っていれば、それは誤った考えです。そうではなく、自分がキリストにつながっているだけでなく、すでに教会もキリストにつながれているのです。ですから、教会は自分が選ぶのではなく、神が選ぶのです。神が召されるのです。ここの教会にしなさいと、神がお決めになっているのです。結婚で、神が結び合わせる人と結婚するのであり、自分が最終判断をするではありません。それと同じで、キリストがお立てになった教会に、キリストが自分自身を招かれるのです。